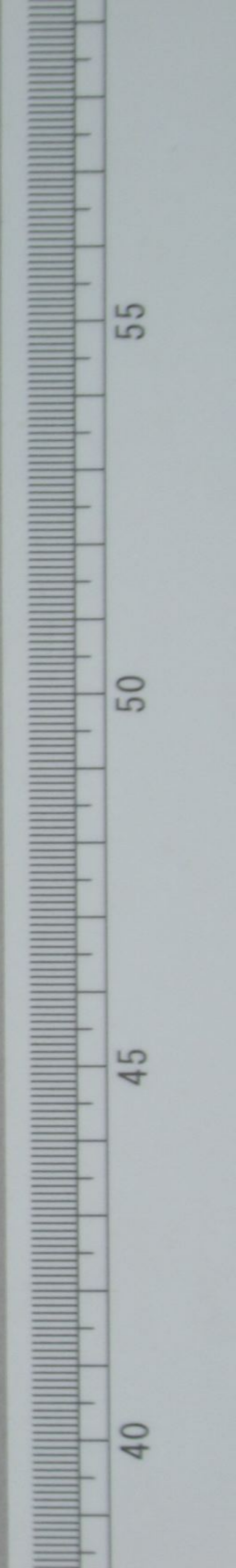
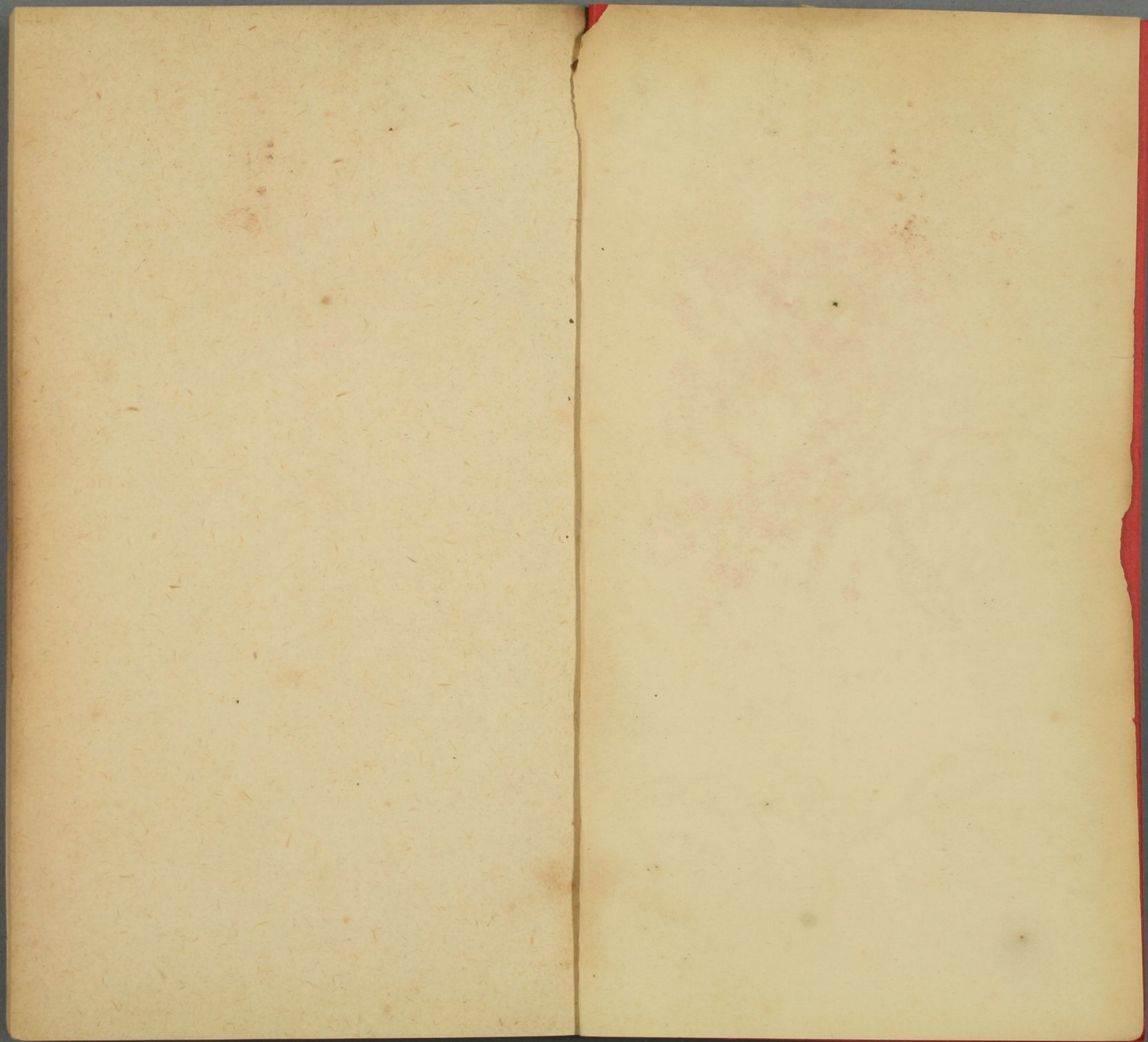
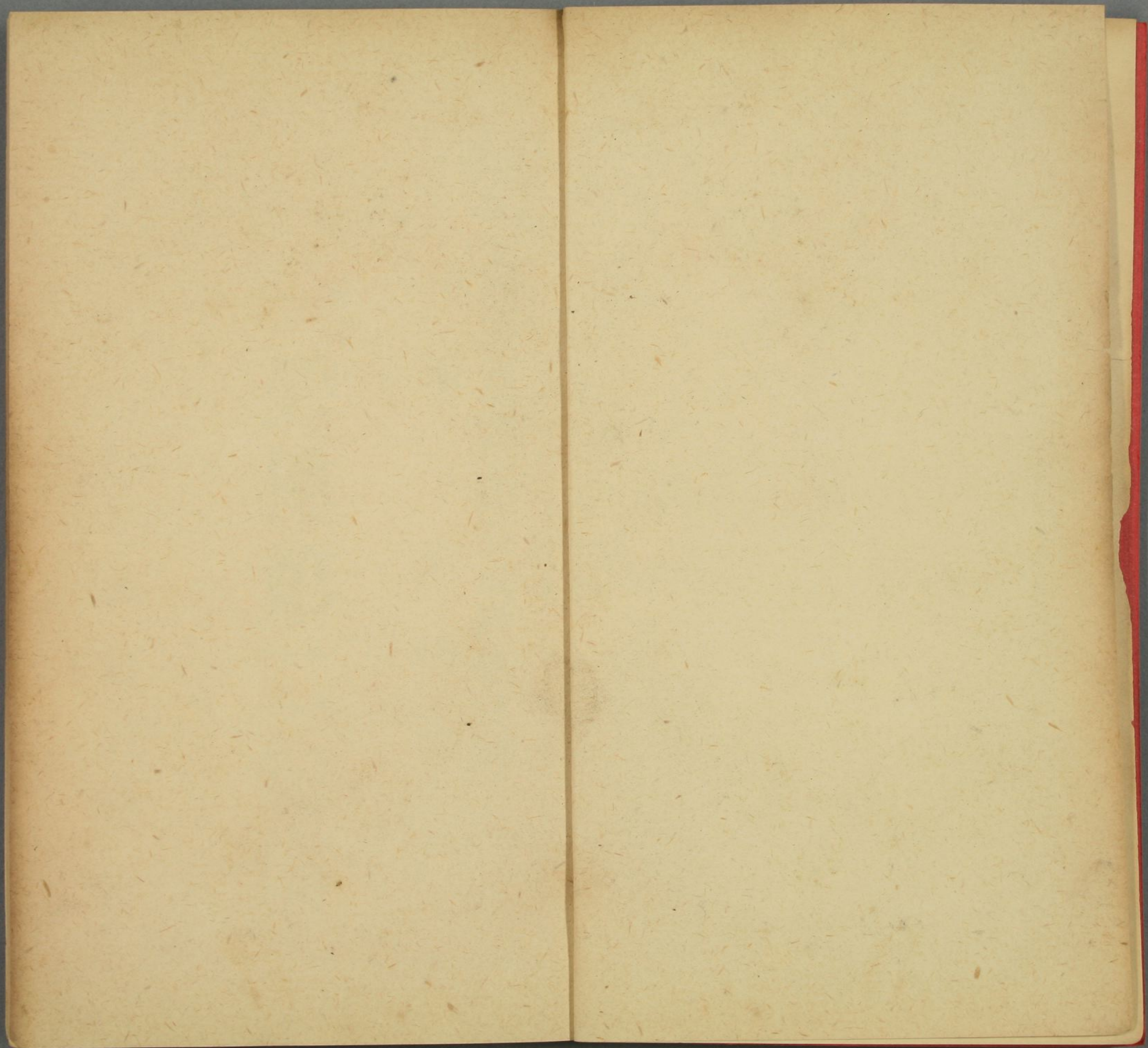


集句二第樓碧一







遠藤古原草氏表紙畫並自刻
中塚一碧樓著

一碧樓第一句集

海紅社發行

小 序

かう自分の句を集めて見ると、

句集は戀人のやうにやさしく、自分のことものやうに可愛い、また自分自身のからだであるやうな氣がする。

私の第一句集「はかぐら」以後、約九年間の作句から氣儘に選み出したが、句數は存外に少ない。それに大正元年頃の私の句境に比べて、今の私の句境がどれほど進んで來たか、自分にははつきりと判らないほどです。この九年の間はかなり努めて來たつもりであつたが、この長い月日に何をして居たのか、どう一生懸命になつてゐたのか、なさ

けなく、羞しい事です。たゞ最近になつて少しく氣の昂つて居ることは私としては何よりも喜びであります。

歩みはこの様に遅々としてゐますが私の踏みつゝある路は正しい、そしてまことの路であるに相違ない。私はこの正しい淋しい道をまじめに進んで行く一兵卒である事を甚だ光榮に感ずるのであります。

私の行かうとする路は尙遠い、けれども私は私一ぱいの勇氣を以て進みつゝあるのであります。自分は日一日と大きくなり、日一日と力を増して來るに相違ない。

自分の第三句集は素敵に振つたものになるに相違ない。

大正九年十月吉日

一 碧 樓

大正九年の作

なま／＼雞頭が地を離れようとしてゐる

裸で飯を食うて淋しいか足を組みなさい

裸で三味をきいてゐる善良だ

蠡とりやめないで雨水が首を流れる

桔梗が咲く彼等がトロの碎けよ

柿青々主人が云ふまゝに家族ら

母をおろそかにして梨の汁を垂らし食つてゐる

處女がせまいく 芒の道のよろこび

蜻蛉の羽をもぐ快さ大地がしんとしてく

霧の夜の家に歸りゆかむ足のもつれ

芙蓉が咲いた私らの飲水を飲む

女が欺されて秋夜の黒髪を匂はせてゐる

光りつくるない霧の夜の一つのコップさへ

草露流れる朝のいくぢなしが歩き急いだ

たなばたの夜の地上の暗さ人動きたり

蘆屋、三句

暴風の松原の木肌の温みつゝ

夜の地曳の者らが焚火の燃えつくすさまなり

泳ぎ連るゝとなく泳ぎ出づ海の青しぞ

ふるさと、二句

青田の中白雲のひゞき地に入る

青き海へ礫す弟と小石あらむ限り

姪を失ひて、八句

うすものの姿の姪を見む茂りの道

茂りのなか一筋の日ざしはひゞきたり

姪がつくりし草花の咲く中にても向日葵

草花が盛りの眞夏死に果てし死にしか

死にしか姪の夏衣の疊まれし重ねし

輿の飾り花の朝顔の苔のなきはなやかさ

夏屏風のかげ兄夫婦は坐りたり

喪にあれば道々の涼しき草の長い葉

繭買も繭籠の大いさも影を作す

萍涼しく家は動かじ

夏の日の小さい門を入りうしろを見ない

朝からの麥仕事のやさしき歩み

わが顔面の痛き夜の葉柳の家の女と

匂ひなき一鉢の草花よ壁よ匂ひなき

裸にて一々の樹の葉見える

螢籠が空な百姓のよるひる

祭前の河原の廣さを往き來す夕も

簾室の一夜の戀慕の身なり

桑匂ふ夜の烈しく手を握りたり

夏足袋をはき捕へられたり

彼女が夏の夜を開かざる一つのオペラバッグ

地からの雑草の茂り女は知れり

夏朝貧民の兒が引抱へたる一つのキャベツ

子供が一人一人見る茨が咲いて白い

日かげりやさしく萍の動き

絲取女が戀の細紐をしめて木々の夜

絲取女が戀のおのがめれんすの帯の手ざはり
うすものたゝむさまさながら客にしてをなご
そゝろ汗引くわがからだよ母とゐる

浴衣のしめる夜の慈しみを受けよ

髪飾りとしてなき笑ひつゝ枇杷を食つてゐる

わが嫌らず垂れこめた青簾

一八が咲いた風吹き去る空よ

身の冷え顫ふ苺ふくまんか

繭買遠くも來し河の流れ

雲雀なく朝の纜を解かんとすつゝしみ

一つの蛙の死に乾きて地上

桐の花咲きし森かげを出でじとす

桐の花咲き工場頼もしからず工場主

桐の花晝のけだものゝ尾太い

母どもの足りなく日傘軽くて少女

お寺の屋根のつまらなさ日傘さして来た

河原の茨咲き満ちて肥満な彼女と逢はむ

辛夷が下の井戸の水流すばかり

去なす虎杖の四五本を噛め

かげろひやますうすくかげろひて父の墓

木挽がいのち麥の青くて

鶏若く春の夜の家の闇

芹長ける朝晝のうす雲のひいきありぬ

春の雨夜の人の寂しさの腕太し

いたどり噛む心やゝに平かにして朝から

處女が朝曇りの地のうまこやし茂れ

人の醜さ草餅をくらへり

牛や牧者や生き汚れ残雪

母のもとへはや歸る摘草

老いしが見る山を焼く火の燃ゆる

春田のつちくれ一つ手にとらむ聲なし

旅人は旅をついけようとする残雪の山の大きいさ

春曇り日のつらい工場の廣い

雪とけ果つる一本の木の根なり

彼岸ざくらを眺めわたすはかなさ

女が心燃ゆ春晝の牧柵の低い

春日の藪の巖にあそべる子供ら

菜種のつぼみもつ明るさ風吹くか

のらくら羽織を著て菜の花が咲きそめて息子

男女ら絶えざる争ひの青麥が伸びる

春草の青み醜女が失せず

空澄んで親爺が死んだ裏藪の梅

夜の道の枯草のよろこばし枯れしなり

家が短日の子の顔の白さ

わが大爐の一夜一夜の山が根

枯草焚いたばかりで別れようとする

一月一日のわが焚火す胸のあたゝまり

いとちさき輪飾の何の飾もあらぬかゝやき

霜夜逢へばいとしくて胸もとのさま

霜夜の厨夫がねる前のやさしさ

火燧ふとんの華やかさありて母老い給ふ

雨夜の一室の火燧の容ち崩さず

錢持たすなかゝ冬草の緑

爐べの一人一人去るを去らしめ

身ぞ愛しやまところたつのぬるいあたゝかい一夜

水鳥見たはかない満足で歸ります

雪夜の女少し偽りを言ひて去にけり

師走の満月をあはれよろこべ漁師らが子ら

わが蓬頭を擲るなしか今日もこの葱畑をゆく

道の霜の水づく何處までも送りたい

身いとしき雪の日のしごき帯をひきしめ

鴨打を憎み歩み

舟をさつさと出す二三人鴨打め

大正八年の作

わが首卷のわが匂ひの雨の夜

柿の核を見るまことなるひとときや

家々ぎつしりつまつて少女は手套の快く

わが道の冬の丘のなだれ睜めねばならない

娘たちが初冬の會堂の建物の古び

庭の枯草のほのかなる赤みを見せて我が家

君に追ひすがる道の枯草の匂ひ

夫婦が日日の磯の巖の師走

わが行く冬の野の小鳥よ翔ちて小鳥よ

われらが島端は浪のしぶきの短日

林檎を噛ちり肉體を恣にあらはす

わが短日の林檎置き輝きて

娘は短日のいぶせき家々を見て過ぎんとした

初冬低い塀のうちに働け

夫人はこどもを持たないで冬の街の賑はひを見た

雨夜の柿を手にす笑ひたり

死鯨も藻の屑もぬくみ

豪雨となりし鯨繩を沈め

冬めく夜の何事もなき夜の菊の花

蝨取りが僅かの蝨をとり山々の連なり

鍛冶屋が藪の秋誰とても往來した

鍛冶屋は火花を散らし秋の夜の家に住みたり

鍛冶屋が午休みの青空から何も降らない

秋の鳥に鳴かれる家の井戸を覗いた

大根畑を戻る顔を濡らす雨の明るさ

月夜ひもじくもの食ひつゝしめり

雨夜の巻たばこのうまさ女は乳を包んで

鯨釣の歸りの鯨が少なうて洲崎へ灯が入つた

酔うては蕎麥刈に手を出したくて來る

鯨一連を一籠とす籠

紫苑の一つのテーブルへ來ては去ぬるはや

畑の土が夜となる牡牛青柿

わが霧にぬるゝおもてをあげる

霧の夜の白首とばかり思へないで地を踏む

月夜のうすい著物をきて家を離れずにいる

私が大函の謎のさじのない

刈粟残らずをしまつて倉の白い

犬が犬の匂ひの露けき

星空となる一つの四つ手の獲もの

煤降る中明方の彼等が四つ手

月夜のわがそびら君方に見らるゝ

秋の日の日中の野の石のぬくみ

藁屋根が腐る柘榴を食つて居る

黒鯨逃がした水中何もなし

残暑の家の人々の貧なり

残暑の野を廣う見渡し工夫は歸れなかつた

巖が根の深し粟實りて垂るゝ

送り火よ燃え盛り地上に明る

墓参の道の月となりし手あつし

暮參戻りしうすものゝ姿見らるゝぞ

粟の穂垂れ老人かうべ垂るゝ

紅蓮家をめぐり咲き男女なり

丘々の低いふるさとの夏の夜の流行唄なる

盆提灯を繕ふわが膝に抱く

盆提灯二つ吊らんとする三つ吊らんとするおろかさ

盆が來る家うちの日射しに坐すか

粟の花の地に落ちみだれ光りなし

牧夫が肥えるあはれ粟の花の匂ひ

梅雨入りの降りの雞の首ほそくし

空の白榮ゆる少女が袂

白榮ゆる海のかくれ巖のかくれた

森から風の吹く桑の實食ふか

梅雨の寒き夜の笑ひひゞきてや

梅雨の朝の竈の火焚く者のしばし

形見の帷子取り出される畳へおかず

此夏我家を出たくない何の心なる焼茄子

麥の刈跡の廣々し白飯食むか

さばかり麥仕舞の馬をいたはる者や

麥扱きの満月となりし家そと

音なく立ちし桐の木のみらさきの花

我らの桐の木二本の離れて咲いたむらさき

麥畑の實入りを見て立去る者どもの徑

單衣著の母とあらむ朝の窓なり

麥秋の河のうねりうねり入る海や

夏めく日の鴉ゆく空のしばし

淺草の夜の酒をのみ水をのみて夏めく

行く春の朝日さす飲む水

薔薇の花を見る私の蝕める葉を見る

夏めく家そとに流れ逝く水

山風の吹く露畑を出で、吹かるゝや

母子が夜の大海の夏めき暗し

朝日夏めく空船の船頭も妻も

さし潮の我が舟の浮きし夏めき音す

榊網の榊形のおろかしく春の大雨

人群るゝ中苗木の一束をほときあたまたまあがらす

春の夜更の一室に水をのみてこぼさず

春晝わが職長の髪垂れさがりて額

隴夜君とあれば小石拾ひあげたりし

夜の菜の花の匂ひ立つ君を歸さじ

春の日のくれの横浪をうける今ぞ歸らむ

一島の麥の穂立ちの巖々のたゝすまひ

日毎の家裏の菜種畑の明り嫂

辛夷が下の枯笹ぞ土の粘りぞ

春の廣野の風吹き立てば我厨に戻る

風吹いて蛙をつかむ者らである

老が笑ふ春の磯畑の石の白く

雛の日の軒垂れて我家の雛あらず

雀が巢を立つてしまふ屋根の空なり

巢立子飛び去る我らが井の淺し

すみれをとらむ道の直きおどろき

牛の大きく牛小屋の春の山べ

針魚繩一流しの引汐の巖出づ

雀の裸子がとられる眞急なる梯子

燕がなく夜のとかうかうべを垂るゝ

櫻の幹太く牛の角のまがり

蟹をとる二人が冬の入海のさゝなみ

一人は首巻を巻いて死蟹を手にす

冬の晝寢をする舸夫が死蟹の一箒

海鼠の一桶を抱へ歸らんとす渚の波

梅が咲く海鼠の桶の水の多少

二本の梅が咲く家の貯への藁嵩

ペラ／＼の首巻我が巻けば風邪で死なない

ふるさとの餅のまるきよ風邪氣味の夜の幾度手にす

埠頭を没す潮の芥の春を戻つた

小娘なれ手套を袂にす

我らが舟の寒風を歸りつきしぞ戸口

家を出でゝは早春の海べの男女に接す

正月のマントの襟を立て憎まれてあれよ

懷爐を買はんにもこの森道を來た

彼の女は俤にて去る鴉は浮いて流れる

早春殊に山ふもとのわれらがやしる

工女ら休む日とてなく早春の山の邊の濕つた

埋火一夜の河音の荒立ち明けんとす

春の夕靄立つ二つの橋を二つ渡つた

大正七年の作

飽かず暮らすなか／＼炭とりぞ

短日の黒いさかなの中にても穴子

帆布の匂ふ父と子との短日

冬夜の一室の醜き女らよ許す

赤い落葉の一日の脊をまるめて人よ

港一ぱい舟の戻る冬の赤い襟した

水鳥しろく丘裾を急ぎ廻つた

かの夜の埋火も彼の女も闇

埋火かきたてゝ赤い慰めのなし

一日の疲れの足袋を脱ぎ揃へた揃ふ

葱畑のたのしき酒に酔うて眠らん

曼珠沙華つき挿す水の少なし

弟息子は芒白い野で芒ばかり見た

私が見堪へる芒の根の濕りです

上人の御襟卷の軽い捧げたし

逐はれ越ゆる夕月の山の草の實

曼珠沙華咲くへ來た男の顔のまるみ

我れ逃げず沙地の二三本曼珠沙華

曼珠沙華腐れる人の往來す

河上の兒らが曼珠沙華立ち腐れしぞ

月夜の山々のけだものよ毛を持ちし

柿を頰つやさしうて舟板の白らけ

梨を食うてゐるやさしい悪者でした

わが風邪氣味の夜の美しき電車轢くものゝなし

秋の山が根のこの水を涉りて父子

栗畑の道のくねりよ忘れず來たり

身のありがたき石垣の草のうす紅葉する

曇天の秋の人々よ錢持ちし

風邪氣味のこの夜のちいさき鮎のひかり

風邪心地の眞晝の垂穂の稻の水のべ

子を背負うた者の咽喉見せて稻が色づいた

棗を食ひこぼし事もなう手を切らうとするも

5

棗を盛る一つの鉢を得んほどの願ひ

茹栗うまいうまい流産した顔を見せとる

家々の人の聲す栗の穂が垂れた

4

我が手甲のかたい一日の薄紅葉見た

冬來る髪に油して人を苦しめ

柘榴酸つばい私の前の牛が動く

露の朝の牛の頭を見い老爺も見い

悼、一句

星匂ふ幾夜か窓を閉ぢたり

秋の鳥の聲を偶々に聞いては菜切庖丁錆びる

つきしろの舟子舟板の匂ひ

栗畑の雨の日いたづらなる山の根

となりの男牛となりの青柿の澁柿

黒塀よ低き秋の日の善人來る

小窓よ秋の日のわが兩手汚れた

糸取女背を見せてばかり日没

荷馬車が唐辛子畑へ突入る事もなく馬の口とつた

萩が咲きそめる川向うできつい労働だ

秋日の汽車へ乗込む若い地主さんよづんく

おかみさんカンナの花が何ともなく家へはいつた

これほどの事を嬉しがる麻服著とる。

一人の若い醫師の何とはなく汗ばみ苦しめり

夫人よ炎天の坂下でときまぎしてよろしい

網シャツを着て死んだ鱸ばかり見た

かくし男が眠るであらう盆の高潮があげてくる

一冊の日本歴史よ樹の下の眞夏よ

眞夏の鏡の前の何ぞ我れ戯るゝ

夜涼のてのひらの乾きて夫婦

蚊遣の草のしめりを知りたりしふたり

商人若々しく雑草がかたまり咲いた

家の空の三つ星が三つのさまのうれしく

白らけ風いだこの海から鱈を釣つて毎日

青い桐の木の下でじつとして惱んでゐる

簇を折るしたしみ眞向きに坐る

漁夫ら裸が苦しい夕ぐれの何かと話す

裸苦しき桐の葉の破れ二三枚ならず

或夜の賽がはつきりして夏夜の男女なり

夫婦は赤子があつてぼんやりと暮らす瓜を作つた

牛の角がぐつと曲つてゐて麥が熟れ過ぎた

麥が熟れ過ぎた一枚の畑を忘れず死ぬる

夏の林のうちに斬りつけん何物もなし

早朝うすものを著たこの者に逆らひ

この朝うすものを著て佛壇の前にひさしき

河原ひろく愚物が汗を垂らした

うすもの哀しき身のほどのこの夜が明けた

單衣を著たしんじつ舸夫が水を恐れ

秣の一車のかげでさゝやいて夏の日が来る

蓴菜をすゝる我が肩をおとし亡ぶべし

雨ふりそゞぐ地よ看守汗ばみし

夏一夜二夜この者しゝむらの冷ゆる

暖き日ぐれの艶なる者消え戻らざるべし

好かれて筍茹る間を待たされまして

大海夏となる首細き者ら首太き者ら

篠懸の葉が茂つて人々が蒼ざめて躍つて

螢がころゝ死ぬる晝で古いお前が帯をしめて

この池が潰れる夏のはやり唄のいくさりも知つてゐる

もの食ふ何ぞたゞによろこばし我夏に入る

君来るよろこびの蠅叩の柄短い

胴長の犬がさみしき菜の花が咲けり

若者からだ痛き日ぐれの蕨食ひけり

日ぐれの鱈網の烈しき身を躍らせて網子

夜の冷ゆる寄居虫も砂も

汐干のことの憤り飯を食ひけり

種まきおくれたるやさしく蒔かん

花見の出かけの赤い面を持ち捧げたり

花見の鼻高面をかぶりおかしき坂を上りて

息子の無理が通る桑の木が立つた

菜種が咲きかけた夜明方の貧民

春一夜明くる捕へし者のてのひら

惚れた桑買さん黒いお膳についた

桑買さんに惚れる溪の音あらあら

針魚のあはれことごとく並び揃ひたり

針魚の口の尖りを笑はむとしたり

春一番が吹くことも家の内に吹かれたり

桃一枝を活けてこのよるの布團薄うし

女労働者枯草の匂ひ幾群となる

洗禮式のすべての窓をあけ窓の木瓜赤し

まじめに犬のからだを見てうららかな

此木がきつと芽立つてあなたが私にひきずられる

深川めしを食ふ春日のわが肋覺ゆる

ささらぎ晴天の人の慈しみをうくる

凍る日の一人の戯奴が煙草持ちたり

寒の雜穀倉でしたゝか言ひ責められる

寒鰯を食ひあらゝしく言へどこの伯父

硝子戸よ烈寒のものを食ひ散らし

師走の一つの島の砂濱

腹を洗ふ水の桶を胸もと

赤子が死んだこの家の飯と湯豆腐

霜夜の物音きこゆ手を伸べる

水べにはげしき働きの足袋穿けり

煮やつこを食ふお前のうしろがすつとあいとる

あんこ鍋のいちにんを捕へたり

正月吉日の菓子をいたゞきて打伏せる

串柿ちぎり食ひぞんざいに言ひます

船長船を離れてゐて派手な首巻しとる

松納めともなれば前の山々

大正六年の作

霜が地に下りる堅氣であるまいやつ

阪町ででくはしてしまつて黒い襟巻をしとる

冬の日のお前が泣くそのやうに低い窓

冬の夜の我が持ちて人形の眼の動く

海鼠突の兄弟が家に戻つて來てしまつた

海鼠を採らんはるく陽があがる

酔牡蠣のほのかなるひかりよ父よ

心躍る霜夜の登の雑な

理髮師霜夜の人體圖よるこべり

處女なれつかくと霜を踏み去る

埋火の一夜の名残の我れ

闇から來る人來る人この火鉢にて煙草をすひけり

酒を飲みわが綿入のたもと

赤土匂ひ夕ぐれとなれば女あるきたく

茸飯などを食ひおそろし日過ぐ

兩手さし伸べうす黒い炭を掴んだ

母よ葉の多き秋草の一束ね

霧の夜の船造りの大工布團に入り

あけぼの、横雲の冷ゆるものを去なし

酔へば秋の夜の板の間のおもしろく

己れ首太き秋夜の行く人と連る、

秋の晝赤子口を突出して何ぞ

牛を屠る朝々の庭の露見たり

葡萄を食ひ暗い一室を出でられず

桔梗咲けば牛のからだに觸るゝ

むすめ白痴の秋袷肌へに著けり

露冷えのよろこび口籠りたり

漁夫が稼ぎのおもしろくなく草の花咲けり

やまと揚子は身に添ふものゝつまらないものゝ冷やづく

花火あがる夜のよろこばしくへさきのほそし

秋風家吹けば百人の女もの食へり

夜をたのしみの船大工若く秋風吹けり

井涸れし我等が青い雞頭

母よ巖を打つ浪のしぶきの秋

蝨を焼き笑ひ合へるこの家

こどもをひき据ゑまろき梨をとらする

稻むらへ追ひつめる者の黒髪

秋の崖急なれば男女むつみけり

子を産みこのかたの澁柿の木が二三本

泡盛に酔へばいちにんの肩先を突き

日覆を掛け小さい魚一つ一つを殺す

十八歳の工夫工事中感電して死ぬ、三句

若い者が死んだ涼しい日の日覆垂れ

からだ逞しき死骸單衣蔽はれ

新らな葭簀眞急に立て掛けられ

葉櫻秋となり借家人嚇さるゝ

雑草の花咲き人の醜き

罈かけの一繩沈め果てたり

涼しき晝の腹減りしまゝ家出づる

夏夕べ娘たちの行くうしろの廣さ

人蒼ざめ一八の根を掘れり

逢はむ夜の茂草踏みあまりたり

日けぶる我だちが巖かげの夏

夏足袋はきてよそくしおのれが聲

辨天祭の單もの著せかけらるゝ

佛壇の戸をあけさせて寝る榻をつらしめ

ある日はひとりで體操をして蠅が淋しい

水を貰ひにゆく夜に入りてからだ暖き

父よいつこもかげろひてあり桐の青葉も

霞切目の前に鳴きさびしまるゝや

毛蟲落ちる今日も土を踏みものを食ふ

春潮すんく引いてゆく我が家に居らむ

酔つぱらつては春夜の佛の花をつかみ

燕鳴く日の中からだ冷え来るや

胡葱一束ね萎びたる手にとらず

春の夜のつめたい腕垂れたり

夕ぐれの鱈を買ひ占むる問屋

魚じまある朝の庭木眺めやりたり

疾風の春の樹の下の人

誰でもいゝ君の汐干連れの一人の俺か

雀子の育ちゆくひくい煙突

松露のすひものその夜の人らなぐさます

胡葱一うねにつくり年とる女

水ぬるむ不漁の手濡らさずをる

黒い風呂敷に何もかも包み梅林

あいまい宿屋の千枚漬とそのほか

蕪の葉をつかみ風こゝろよき

女の兒眞白いマント着て近より來る

善い坊さんが來て冬の海蒼き

雪ふる夜の障子多けれ逝くや

貧しきものの高つきの羽子なる外れす

手毬かゝる麻の葉のほかはなき母よ

大正五年の作

枯野樹ありて馬のやさしき

お前のことに汽車にのる湯豆腐うまし

冬帽たゞしくかむりたる男さみしければ去れ

冬帽著し人すんく過ぎゆくわれすぎゆく

川大きく流れ宿屋のむすめ肩掛す

平凡な火鉢買ひたくてあるく晝

部屋に持ち入りし野菊花うら

墓にまゐりゆく笹草にぎはへり

はらく霧のなかあうらてのひら

梨嚙ぢり捨つ窓そとの廣さ限りなし

の影なき葱畑のお會式來たり

蕎麥畑白きばかり踊りすゝまぬ

鯨繩四五鉢女房を持ち

盆の人々の裸なる藁屋根厚し

胡麻花咲きし盆の休み日の袖よ

樹の中の柳散る朝の家音よ

足もとの地の白き魂送る

家の間のひやづく夏娶りたり

人夫がしらよ樹のもとの晝顔咲ける

からだいたはる蓮苔みたり

蛇ころしたる空の青さの和み

三十九

十一

鯨引らもどる廣道ふめり

游泳衣著し水に聲出づ

をとこ仲たがひつゝ莓の熟れし

莓畑の日に噎せつ娶りたり

百日紅花咲き地のものゝ巖

男ばかりあるく葉柳の道のゆがみ

漁夫らいらく地を踏める夕べあたゝか

あさひばりなきひやく河床赤し

淺草の朝長し角店春日

網やぶれ讃岐の山の雪残り

暖き夕の別れの俣の揺るゝ

ひたぶるに機械場を出たき梅咲きぬ

老人よ小鳥よ東風吹く赤し

東風地を吹き馬は繋がれてゐる

木瓜つぼみにぎはへり家を風吹く

黒い外套を著て君が泣き入つて辛夷の花

河水が流るゝ襟巻とれり

大正四年の作

空廣にみぞれ來し牡蠣を打つ

口どもる葱畑の廣き中

顔小さき女なる寒の街なれ

煤を掃く床下の廣さのまひる

くろちりめんひんやりすあかゝねひばら

日照りつゝ鴨打に港小さけれ

障子が照る葱畑に歸り著きたれ

我家のまへの夕まぐれ蝨つかみたり

葉雞頭に洗ふ鯨串に今日足らじ

瓜もぐに荒浪の鳴り暮るゝはや

葵立つや盆月に入りし夕嵐

晝顔に暴風となりし門鎖す

石だゝみ踏み立って木蓮赤し

柘榴一本の脊戸春の雪積もりたり

大正三年の作

サよ思ひのしと花若と眺るも思つるあり

6 結改帳にくろくのまゝ人をもつと侍とていふ

切りうきこすねばおこしとていふ

かゝりあつたふこしとていふ

歌留りの勝敗でかつとていふ

産れこふとていふ

夜更くるほどに見し炭の木目かな

女愚なれば葺山の道の乾き

Faint blue ink handwriting on a rectangular slip of paper pasted onto the right page of the notebook. The text is mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side.

ちせ んま

望み 幼怯と 離れゆく 子鳥 なく

現行 犯つ とうり は どの 女に にも 小 たる けし

花 にやよ

雨 にやよ 降り せし ぬ 二人 滴え まじ

あま

田 ちせ は 何 故 目 ちせ 下 ちせ へ 赤 ちせ くの 影 ちせ 照 ちせ の 赤 ちせ く 白 ちせ 雲 ちせ 子

夜更くるほどに見し炭の木目か

女愚なれば茸山の道の乾き

日高まさりつゝ我家包まんとす枯野

石切り夜の心に移らんとす蜜柑かな

額広い小母さんに氷柱光りつくるなし

君が手套は青くなが〜とつきぬ唄

灰作ることにはわが焚く藁火かな

夜更くるほどに見し炭の木目かな

女愚なれば茸山の道の乾き

牡蠣賣の西日に噎せて詮なしや

女ごゝろに藪道が赤う美れる

別冊
洋紙

全千集
本三集

五三三三三三三三三三

大正二年の作

産婆うとうと火桶に寄り二階明るい

10 親鳥まどろみ春の潮鳴りたうたうたう

11 海苔を焙つてる俺の春の廣かはおもひ

12 海月取りいらいらと我家見る夜かな

13 繭買の親切に姐さんしんと坐りけり

14 若葉くゝる母子のもの池の水少くな

15 稻花火欲しう工女に雨ふりぬ

己が掌接、吻ひつゝ、青年は接吻ひつゝ、草紅葉

團栗は無意識に轉び悪事は根強く進捗す秋日かな

日射しつゝ、我心爛れたり葱畑みつむ

小牛は何もなき冬田を眺めハタと走り止みたる

鮑屑の出る有様こそ面白し棟梁はこの朝識りぬ

大正元年の作

うすもの著てそなたの他人らしいこと

紫ばかり朝顔が咲く工場住ひよ

生まじめな夫人萩に椅子出して

掌がすべる白い火鉢よふるさとよ

酒知らぬ男に冬日黄いな森

翼れるそのうなぎへメスを刺させい

少年は雞卵を敷へてしまつて冬の蜂

6 雞肉屋のむすめは風邪氣味でランプ灯して

7 乳母は桶の海鼠を見てまた歩いた

淺草、二句

8 道から闇が流れ入り蜜柑酸つばい

9 コートの裏ちらと緑なるひる鍋

一碧樓第二句集終

23119

大正九年十月二十三日印刷
大正九年十月二十六日發行

定價金壹圓五拾錢也

著者兼
發行所

中塚直三

印刷者

東京市神田區三河町十四番地
林繁藏

印刷所

東京市神田區三河町十四番地
四版工業株式會社

發行所

東京市外高田町大原一五二七
海紅社

振替東京三〇二一〇番

□ 一碧樓第一句集 (はかぐら) 絶版

□ 海紅第一句集 絶版

□ 海紅第二句集 (定價 送料 共) 圓

□ 我等の句境 (定價 送料 共) 圓

□ 月刊海紅 (一部三十五錢 一年分四圓四十錢)

海紅第二句集、我等の句境は御申込により代金引替郵便に
ても送ります。(引替料共各一圓十錢)

東京市外高田町大原一五二七

海紅社

(振替東京参〇壹壹〇番)

